

## 会員新刊紹介

### 中島泰貴著

#### 『中世王朝物語の引用と話型』

(ひつじ研究叢書〈文学編〉2)

本書は、「しのびね型」という話型を持つ中世王朝物語が王朝物語を引用する際、その意味を限定し収束させてゆくことに主たる関心を向けた研究である。

「しのびね型」とは、本書の表現を借りるなら「相思相愛と思われる男女が、様々な障害によって別れ、男は出家遁世、女は入内し栄華を極める」という枠組みを持つ物語である。この話型に含まれる作品には、『しのびね』『石清水物語』『海人の刈藻』『葎の宿』などがある。本書の構成は次の通り。

序章 中世王朝物語における引用と話型

第一章 「しのびね型」としての『隆房集』―物語  
文学史への一視座―

第二章 「葎の宿」題号考

第三章 「しのびね型」試論

第四章 『石清水物語』の引用と話型

第五章 『海人の刈藻』の引用と話型―秩序の作り

方―

第六章 「うたたね」における物語引用の位相―物語引用と回想表現―

第七章 「うたたね」における語り手と物語―「なり行かん果」への眼差し―

結び

第一章では、「しのびね型」物語における『伊勢物語』引用のほとんどが、歌人藤原隆房の『隆房集』に媒介されていることを論じている。続く第二章では、歌語「葎の宿」の表現史をたどり、『葎の宿』（一部散逸）が「しのびね型」物語に連なる作品であることを確認している。また第六章と第七章では、仮名日記作品である『うたたね』を対象にして、引用する物語に対する「しのびね型」中世王朝物語との扱いの違いを明らかにしている。

さて、稿者が特に興味を持って読んだのは、第三章から第五章にかけてである。第三章では、「しのびね型」物語における帝と臣下との独特の関わりを分析し、「女を共有することによってもたらされる君臣和合の理想」という世界観が、「しのびね型」を支えていることを指摘する。そして、それだけでは読者の共感を得ることができないため、男主人公の悲恋遁世という結末が必要

だったと説明している。第四章では、「帝の御妻をあや

まつ物語」である『伊勢物語』が「しのびね型」の形成に密接に関わっていることを考察し、物語を「引用」するという行為を通して男たちが心情を共有していることを明らかにする。また第五章では、引用された物語による「暗示と回避の反復」が悲恋遁世譚を導き、前章とは逆に女の不安が物語に秩序をもたらしていることを明らかにしている。

「しのびね型」という話型は、「引用」という行為によって王朝物語の意味が限定され収束させられてゆく地点である。そして、本書を読んでいくと「しのびね型」物語が「どこまでも男たちの物語」であることがわかる。第四章で指摘されているように、物語の引用は男たちによってなされており、「決して姫君によってではない」のである。また、このような「しのびね型」という磁場から抜け出す可能性についても言及されている。すなわち、「しのびね型」物語を姫君の立場から読み直すことや、女流日記作品である『とはすがたり』を二条の立場から読み直すことの必要性などである。

本書は「しのびね型」という話型と「引用」という行為の関連性について丹念に考察を重ねた良書である。著者の今後の研究がいつそう期待される。

（二〇一〇年二月刊、ひつじ書房、A5判、一九二頁、

五、八〇〇円＋税）

（鹿谷祐子・名古屋大学大学院博士課程後期）

## 山下宏明 著

### 『平治物語』 中世の文学

本書では、多くの『平治物語』諸本のうち、語り本と古本の主要な二系統の本文を二部構成で収録している。第一部は金刀比羅宮蔵本（いわゆる第四類本）を、第二部は上巻・中巻は陽明文庫蔵（一）本、下巻は学習院大学図書館蔵本（いわゆる第一類本）をそれぞれ底本として使用し、主だった三冊の注釈書をもとに新たな注釈を試みている。これまでは、永積安明・島田勇雄の『日本古典文学大系』、矢代和夫・松林靖明・信太周・犬井善寿の『新編日本古典文学全集』、栃木孝惟・日下力・久保田淳の『新日本古典文学大系』などの諸注釈を参照して考察が行われてきたが、本書は一冊で二系統の本文を比較することができる点できわめて実用的である。頭注には、他の軍記物語の作品とのつながりや上記注釈書の参照箇所を掲げており、研究史を確認する際にも利用し

やすい。

また、第一部・第二部ともに本文の各章段の末尾に\*を付し、補注で解説していることも、本書の特長の一つである。この\*は、各章段が物語の中でどのような位置づけにあるのかや、前後の話との関わりなどを示し、各諸本の特徴を見る上で重要な問題点について詳しく示唆している。その上でさらに『保元物語』『平家物語』との読みの上でのつながりにも触れ、三つの物語の連続性を明らかにしている。底本の本文・注釈・補注のあとには、付録として「底本比較対照表」があり、内容ごとに見出しを付け、上下に並べて示すことで、諸本の対応関係や各本の特色が、同時に比較できるように工夫されている。

従来から、『保元物語』『平治物語』『平家物語』の三つの物語は、読みの上で三部連作といえそうなつながりがあることは指摘されてきた。王権の存立に源平の対立が絡み、その動乱の物語の中には必ず後白河天皇の姿があるからである。

本書の中で、著者は『保元物語』に始まり、『平治物語』を介して『平家物語』へと三つのいくさ物語のそれぞれの諸本が相互にからまりながら語りを拓いていったものと想定し、「物語の語りを読むことを通して、『平

治物語』の平治の乱の歴史としての読みを考える」としている。保元以後の争乱については、撰閲家の中枢部にいた慈円の『愚管抄』にも彼自身の歴史の読みが記されているが、これら三つの物語の読みとは重なっていない。史学者が歴史の真相を探り、文学、物語に書かれた歴史を「虚構」と批判するのに対し、著者は享受の側から「物語が語る歴史を物語として読む」。そこには、物語に即して読むことで見えてくる、歴史の側面を探ろうという試みがある。

本書は、軍記物語研究の積み重ねの中で見出された成果と著者の意欲的な研究姿勢が窺える最良の書である。

二〇一〇年六月刊、三弥井書店、A5判、四三九頁、

九、八〇〇円＋税

(横山知恵・名古屋大学大学院博士課程後期)

受贈誌(二〇一〇年九月〜二〇一一年八月)(2)

- 京都府立大学学術報告人文 六二、和漢語文研究 八、  
書院部紀要 六二、語学と文学(群馬大) 四七、高知  
大國文 四一、佐賀大國文 三九、就実表現文化 五、  
白百合女子大学研究紀要 四六、上智大学国文学論集  
四四、聖心女子大学大学院論集(聖心女子大) 三九、  
四〇、専修国文 八七、八八、文研論集(専修大) 五  
五、国文橋 三六、中央大学国文 五四、日本語と日  
本文学(筑波大) 五一、五二、国文学論考(都留文科  
大) 四七、国文鶴見 四五、帝京大学文学部紀要 四  
一、四二、湘南文学(東海大) 四五、文学論藻(東洋  
大) 八五、徳島大学国語国文学 二四、同志社国文学  
七三、七四、国語と教育 三五、三六、奈良大学紀要  
三九、南山大学日本文化学科論集 一一、新潟大学国語  
国文学会誌 五二、国文目白 五〇、花園大学日本文学  
論究 三八、言語表現研究 二六、二七、弘前大学国語  
国文学 三一、広島女学院大学国語国文学誌 四〇、人  
文学報 四二八、四四三、四四七、三重大学日本語学文  
学 二二、武蔵野日本文学 二〇、山梨英和大学紀要  
九、立教大学日本文学 一〇五、一〇六、立正大学国語  
国文 四九、立命館文学 六二一、上越教育大学国語研  
究 二五、滝川国文 二六、横浜国大國語研究 二九、

- 人文(鹿児島県立短大) 三四、椋山女学院大学文化情  
報学部紀要 一〇、椋山女学院大学研究論集 四二、豊  
田工業高等専門学校研究紀要 四三、法政大学大学院紀  
要 六五、六六、ことば 三一、古代研究 四四、古典  
遺産 六〇、待兼山論叢文学篇 四四、上智大学国文学  
科紀要 二八、愛媛国文研究 六〇、清泉女子大学紀  
要 五七、五八、文芸と批評 一一三、京都橘大学研  
究紀要 三七、早稲田大学大学院文学研究科紀要 五六  
一一、五六一二、五六一三、五六一四、文芸と思想 七  
五、国学院大学日本文学論究 七〇、中央大学文学部  
紀要 一〇七、一〇八、国際日本文学研究集会会議録  
三四、二松 二五、国語学研究(東北大) 五〇、詞林  
四八、四九、鶴見大学紀要 四八、国語国文研究と教育  
(熊本大) 四九、相模国文 三八、日本文学ノート 四  
五、福岡教育大学国語科研究論集 五二、論究日本文学  
九三、九四、日本文芸論叢(東北大) 二〇、三田国文  
五二、國學院大学紀要 四九、成城国文学論集 三四、  
麗澤大学紀要 九〇、九一、金城日本語日本文化(金城  
国文) 八七、愛知学院大学文学部紀要 四〇、駒沢国  
文 四八、国文論叢 四三、四四、汲古 五八、五九、  
近松研究所所報 二一、日本研究(国際日本文化研究セ  
ンター) 四三